

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 17 号

2019（平成 31）年 4 月

聖心女子大学

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、2019（平成31）年2月19日又は2019（平成31）年3月16日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

氏 名	中村 佑衣 (なかむら ゆい)	1 頁
学位の種類	博士 (文学)	
学位記の番号	甲第 38 号	
学位授与年月日	2019 (平成 31) 年 2 月 19 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	三島由紀夫文学に内在する論理と作家像の形成 ——一九四九年及び一九五〇年代前半に焦点を絞って——	

氏 名	中村 佑衣 (なかむら ゆい)
学位の種類	博士 (文学)
学位記の番号	甲第 38 号
学位授与年月日	2019 (平成 31) 年 2 月 19 日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	三島由紀夫文学に内在する論理と作家像の形成 ——一九四九年及び一九五〇年代前半に 焦点を絞って——
論文審査委員	(主査) 教 授 川 津 誠 (副査) 教 授 大 塚 美 保 (副査) 講 師 上 石 学 (本学哲学科)

博士学位論文の要旨

1. 問題の所在

『仮面の告白』（河出書房、一九四九年七月）の他、主演を務めた映画「憂国」（一九六六年四月）や、被写体となった篠山紀信撮影の「聖セバスチアンの殉教」（濫澤龍彦責任編集『血と薔薇』創刊号、天声出版、一九六八年十一月）などがあるように、三島由紀夫は作家像を自己演出し、読者に提供する作家だ。三島の場合、生身の体をただ晒すのではなく、作品同様に読者に解釈されることを容認した上で役者や写真のモデルを務め、作家像を提供する。それゆえ「三島由紀夫」像は三島にとって、彼の小説や戯曲と同様の芸術作品であり、三島文学は作家が前景化した文学であるといえる。

三島の晩年の随筆『太陽と鉄』（「太陽と鉄」「批評」一九六五年十一月～六八年六月、エピローグ「F104」のみ「文芸」一九六八年二月）によれば、三島は、敗戦と世界旅行の経験以降、一九五五年頃から肉体改造を行ない、「肉体」による作家像の形成を望むようになる。三島の表白どおり、三島文学は肉体改造が始まる一九五五年頃を境に、「言葉」による作家像の形成を企む姿勢から「肉体」による作家像の形成を企む姿勢へと変わっていく。本稿はその差異に着目し、「肉体」を重視する時期を三島文学の後期とし、一九五五年以前を三島文学の前期として区別した。文壇評価の観点でいえば、後期の作品の方が評価は高い。その上、三島自身が前期の作品に関して、感受性に溺れたものだと指摘し、その克服のために「肉体」を重視するようになったと述べているため、なおさら後期の方が重要であるかのように感じられる。だが、三島は『太陽と鉄』で、後期三島文学の根幹を支える論理が、「言葉」によって作家像を形成する前期三島文学に内在する論理の応用であることを明らかにしている。すなわち前期三島文学は、後期三島文学の基になり、三島文学全体を支える基盤になった点で重要性をもつのである。

以上の事柄を勘案し、本稿は、三島が職業作家として文学で生きることを意識するようになった一九四九年及び一九五〇年代前半に焦点を絞り、作品を通じて行なった作家像の提供という文学的営為に光を当てることで、前期三島文学、及びその時期の作家像の形成を論じた。

2. 分析及び結果

序章・終章の他、三部六章からなるその梗概は、以下のとおりである。第一部では、敗戦前の短編、『夜の車』（「文芸文化」終刊号、一九四四年八月）、詩『夜告げ鳥 憧憬との決別と輪廻への愛について』（「東雲」一九四五年七月）、そして戦後の出世作、『仮面の告白』（河出書房、一九四九年七月）に共通して見出せるニーチェ哲学の影響に着目しつつ、作品を通じて、〈読者—作品—作者〉間の作品享受の〈場〉と「三島由紀夫」像が生成されるまでを論じた。

まず第一章では、三島文学におけるニーチェ哲学の重要性に言及した。三島がフリードリッヒ・ニーチェを知ったのは戦時中。十九歳の時に、三島は『ツァラトゥストラはこう言った』（一八八五年原著）を意識した『夜の車』を創作し、以降、職業作家になった敗戦後もニーチェ哲学を用いた作品を発表する。本稿は、昭和十年代に傾倒した日本浪漫派

の文学観との差別化を図りつつ、ニーチェ哲学を援用することで彼固有の文学を形成しようとする三島の姿勢を確認し、敗戦前後の三島の文学的営為におけるニーチェ哲学の重要性を指摘した。

第二章の『仮面の告白』論では、ニーチェ哲学を用いて成し遂げた、戦時中の浪漫主義的ペシミズム、あるいは戦後ニヒリズムの克服を論じ、能動的〈生〉を目指す三島文学の新たな精神的基盤の形成を指摘した。

続く第三章では『仮面の告白』を通じて形成された、〈読者—作品—作者〉間の〈場〉と作家像に言及した。本作品は、他者が「私」に向けて語る〈告白〉を叙述することで、告白者と受取手が一種の共犯意識をもって一つの〈告白〉を生成していく瞬間を可視化する。そしてその過程を分析的に語ることで、〈告白〉が、ア・プリオリに存在する真理を明らかにする行為ではなく、告白者と受取手のそれぞれの思惑によって恣意的に真理を形成する行為であることを暴露するのだ。その上、〈書く人〉「私」による、読者に対する作中での呼びかけがある。繰り返し呼びかけを叙述することで、本作品は〈告白〉を受け取る読者像を自ら提示し、〈告白〉を生成する〈読者—作品—作者〉の共犯関係を設定するのである。

上記の事柄に加えて、本作品の鍵概念である〈仮面〉のことをも考え合わせれば、自己像が、〈仮面〉の効用で引き出された自己存在に対する自身と他者の誤解をもとに形成され、いつしか「自然な私」として定着する、という主体の形成の過程が浮かび上がってくる。〈仮面〉は一見浮薄な偽りに映るものだが、仮象であることを前提とする〈仮面イコール表面〉だからこそ、自他のさらなる誤解を誘発し、流動的な変容を促す。そのような〈仮面〉の〈告白〉によって、それまで明瞭な作家像をもたなかった三島は、〈読者—作品—作者〉間のフィクショナルな〈場〉と「三島由紀夫」像の生成を成し遂げるのだ。

次に第二部では、第一部で扱う作品と前後しつつ創作された、三島の親戚、松平頼安をモデルとする〈頼安もの〉(創作ノート『松平頼安伝』執筆時期不明、短編『神官』昭和十年代半ば、短編『領主』昭和二十年頃か、短編『好色』「小説界」一九四八年七月、短編『怪物』「別冊文芸春秋」一九四九年十二月)に光を当てた。〈頼安もの〉は、『神官』『領主』『好色』で私小説的叙法を用いるものの、『仮面の告白』の後に発表した四作目『怪物』では、私小説性を捨象したフィクショナルな語りを用いる。〈頼安もの〉は〈明治〉を体現する主人公の生き様を語ることで、一貫して時代性をテーマとするのだが、とりわけ四作目『怪物』は、反時代的な怪物的人間の悲劇を描くことで、逆説的に敗戦直後の日本の被占領の現状を批判し、戦後の現在に対する作者の立場を表明するのだ。そのように第二部では、『仮面の告白』のような私小説的な一人称小説から、物語世界外の語り手が語る三人称小説への移行で得た批評性に着目することで、第一部の自己演出とは異なる作家像の提示を確認した。

そして第三部では、『仮面の告白』発表後の連作短編、『火山の休暇』(「改造文芸」一九四九年十一月)、『死の島』(「改造」一九五一年四月)、『旅の墓碑銘』(「新潮」一九五三年六月)からなる〈菊田次郎もの〉を取り上げた。まず第五章では、本作品群がトーマス・マンの小説に描かれるような〈芸術家〉を主人公に据え、ニーチェの『悲劇の誕生』(一八八六年原著)に基づきながら展開する、〈芸術家〉による芸術家小説であることを指摘した。当時、三島は持論として、「内面的衝動を一瞬一瞬の形態に凝結せしめて、

時間と空間の制約の外で、人工的に再構成しようとする」(一九四六年三月三日、三島由紀夫から川端康成に宛てた書簡)「ロマンチック・メカニズム」なる手法に関心を寄せていたが、その理論を作品化したものが〈菊田次郎もの〉だといえる。本作品群が、敗戦後の日本の被占領とそこからの解放の時期(一九四五年～五二年四月)に発表されたことを考えに入れば、古代ギリシャの芸術に注目した『悲劇の誕生』の援用は、〈西洋／東洋〉、〈支配／被支配〉の二項対立図式から抜け出して固有の文学を志向するための有効的な手立てであったといえる。

第六章では、三作目『旅の墓碑銘』に焦点を絞り、本作品群のメタフィクションの意義を考察した。本作品はメタフィクションによって、読者が慣れ親しんできた〈主人公イコール作者〉とする定式、及びその定式を成立させる写実主義^{リアリズム}の再検討を読者に促す。『仮面の告白』を契機に形成されつつあった「三島由紀夫」像を相対化することで、戦後の三島文学が次の段階に進んだことを本稿は指摘した。

以上、第三部では三島が、敗戦後の占領とそこからの解放という時代の移行を横目に見つつ、世界旅行の経験で獲得した視野の広さで、独自の文学観を築き、作品のメタフィクションの効用によって、『仮面の告白』で生成した「三島由紀夫」像の脱構築に成功したことを確認した。『仮面の告白』の〈仮面〉は一定の像に確定させない仮象性を前提とするが、『旅の墓碑銘』は〈主人公＝作者〉と見なす私小説の読みの定式に疑義を呈することで、一度定着した「三島由紀夫」像を解体し、再構築させようと読者に促す。『仮面の告白』の頃からのそうした一連の文学的営為に見出せるものこそ、一九五五年以降の後期三島文学を支える論理の基になった作家像の形成の機序なのである。

3. 結論

前期三島文学の形成の背景には、ニーチェ哲学の存在がある。三島は、ニーチェの『反時代的考察』(一八七三～七六年原著)で提唱される反時代性に倣い、同時代の文壇とは距離を置きつつ、反時代的な立場に立って、連合軍に占領される戦後日本の状況を客観的に眺める眼を得る。そして占領期終結の頃になると、『悲劇の誕生』を援用しつつ、〈西洋／東洋〉の階層的二項対立意識から抜け出して、より広い視野で戦後の日本文学を見据えるようになるのだ。

さらに重要なこととして、三島は『悲劇の誕生』の〈アポロン〉と〈ディオニュソス〉の合一の論理を手本にすることで、ストーリーをなぞるばかりでなく、プロットや視点の置き方を意識した創作を志向するようになる。三島いわく、そのように物語をいかに語るかという作品の構造や形式を重視する手法は、演劇の特性であり、「小説」という芸術の進歩のために、そこから学びとらねばならないのだという。そういう次第で、三島は劇的構造をもつ作品を目指すようになる。その実践の過程において、三島はニーチェが説く〈仮面〉あるいは〈表面〉の思想を援用することで、〈読者—作品—作者〉間の〈場〉と「三島由紀夫」像を生成し、固定化されないものとして常に変容し続ける主体を形成する。

三島のそうした試みは、結果的に、日本の近現代文学が重視する、作中に立ち現われる語り手をめぐり、創作者の課題の解消に結びつく。安藤宏が指摘するとおり、近代以降の日本文学では「視点の合理的一貫性、という観点から、誰が、どのような「資格」で語るのか」(安藤宏・高田祐彦・渡部泰明『日本文学の表現機構』岩波書店、二〇一四年三月

p. 159) が常に問われるようになり、作中に見え隠れする語り手の存在をどう表現するかが小説の課題になった。近代以降の作家たちは、作中に立ち現われる語り手の存在を逆手にとり、作品を通じて〈読者—作品—作者〉間のフィクショナルな〈場〉と、作家の主体、及び作家像を形成する叙法を生み出すようになっていくのだが、三島の場合も、ニーチェ哲学を文学理論と連関させることでその課題を克服し、〈三島文学〉を支える固有の叙法を獲得していくのだ。

以上、本稿は三島文学の基盤となる一九四九年、及び一九五〇年代前半に焦点を絞り、その形成の過程を論じた。

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 中村 佑衣

論文題目 三島由紀夫文学に内在する論理と作家像の形成
——一九四九年及び一九五〇年代前半に焦点を絞って——

審査委員 主査：川津 誠

副査：大塚 美保

副査：上石 学（本学哲学科 専任教員）

1. 論文の要旨

本論文は1949年及び1950年代前半の三島由紀夫の作品を対象に、三島の文学的営為を分析し、作家像並びに三島文学の形成を論じたものである。この年代に限定したのは、三島が第二次大戦後の文学界に登場し作家としての地歩を固めた作品が『仮面の告白』（1949年）であり、それによって三島の作家像が形成され、それを自ら改変していく作業を三島はその後の『怪物』（1949）『火山の休暇』（1949）『死の島』（1951）『旅の墓碑銘』（1953）という短編群によって行っていくことになる、という筆者の主張に従うものである。

論者は、三島が肉体の改造を行い、肉体そのものによって作家像を形成しようとするのを後期の特徴と見、（三島の随筆『太陽と鉄』（1965～1968）によると、1955以降という事になる）それ以前を言葉による作家像形成の時期と考えている。三島の前期は言葉により、後期は肉体によって自己像を作り上げようとした、というこの考えは従前の三島研究の定説に従うものだが、その上で、この言葉による作家像の形成が、固定的なものではなく、三島自身によって、また、〈読者—作品—作者〉（論文中の用語に従う）の関係によって改変されていくのだ、というのが論者の主張である。

論者によれば、三島の作家としての自画像形成は、戦前に『花盛りの森』を発表し、「日本浪漫派」への傾倒が見られる頃に遡ることが出来る。その後、ニーチェの影響を受け日本浪漫派の文学観との差別化を図り、その哲学を作品に反映させることによって日本浪漫派から遠ざかり、自身の文学世界を構築しようとした。しかし、三島は戦後作家としての歩みをけして万全に始められたわけではなかった。あからさまに自身と重ねられる主人公〈私〉を設定して自身の作家像を読者の前に提供することになる『仮面の告白』を書くことで、ようやく作家として認められることになるのである。本論文は3部構成であるが、その第一部「I 作品享受の〈場〉の形成と「三島由紀夫」像の承認」の第一章「三島文学における戦後の再出発とニーチェ哲学」において、上述した戦前から戦後への三島の姿を概観した筆者は、第二、三章でその『仮面の告白』を論じる。ニーチェ哲学を用いて三島が戦時中の浪漫主義的ペシミズム、あるいは戦後ニヒリズムの克服を成し遂げ、能動的〈生〉を目指す新たな精神的基盤を形成したと指摘した論者は、しかし三島が『仮面の告白』によって形成した作家像は、〈読者—作品—作者〉の関係の中で、作者の告白を読者がそれとして受け取ることによって成り立つもので、告白者（作家・同前）と受取手（読者）が一種の共犯意識を持って、それぞれの思惑の下に恣意的に告白という心理を形成する行為によって作り上げられたものであり、そのようにして形成された作者（告白者）の

〈主体〉自体が〈仮象〉に過ぎないことを指摘した。

同性愛的傾向を持つ作家三島由紀夫、という一般に流通した作家像は三島由紀夫によって作られたものであるという論者は、次いで第二部「Ⅱ 私小説性を脱ぎ捨て批評する作者の眼差し」第四章「〈頼安もの〉「怪物」論——怪物的人間の悲劇が示唆する戦後占領期への批判意識」では、『怪物』とそれに先立つ『松平頼安伝』『神官』『領主』『好色』すなわち松平頼安を共通のモデルとするいわゆる〈頼安もの〉を取り上げる。三島は遠縁にあたるこの人物を主人公に、反時代的な人物の有り様とその悲劇を描き出しているのだが、『怪物』において、それまでの4作の私小説的な語りや三人称形式の客観描写を用いることで被占領時代の同時代社会を批判し、己の立ち位置を示すことになった。それはつまり、私小説的な一人称小説から三人称小説への移行が批評性の獲得になり、それによって『仮面の告白』とは違った作家像の提示を行い得たのだ、とする。それもまた、三島が作品を通して行う自己像の提出の形、ということになる。

そして第三部「Ⅲ 文学論の確立と作家像の脱構築」では『火山の休暇』『死の島』『旅の墓碑銘』のいわゆる〈菊田次郎もの〉を2章にわたって論じていくことになる。〈菊田次郎もの〉を、三島が言う「内面的衝動を一瞬一瞬の形態に凝結せしめて、時間と空間の制約の外で人工的に再構成しようとする」「ロマンチック・メカニズム」の手法を作品化したものだ、と述べ、ニーチェの『悲劇の誕生』（「アポロン」と「ディオニュソス」の理論）の援用が〈西洋／東洋〉〈支配／被支配〉の二項対立図式から抜け出して固有の文学を志向するのに有効であったことを指摘した。そして、『旅の墓碑銘』が、『火山の休暇』『死の島』をひきつぐ私小説的な作品であるかのように見せながら、その作品世界が菊田次郎によって作り出された虚構世界であることを暴露するという、メタフィクションの形を取っていることを指摘、それがつまり〈主人公イコール作者〉とする定式、その定式を成立させる写実主義の再検討を読者に促すのだ、と述べる。読者の〈菊田次郎イコール三島由紀夫〉という私小説的読みに疑義を呈することで「三島由紀夫」像を解体し、再構築させようとするものだ、というのである。『仮面の告白』以降のこれら一連の文学的営為に、作家像を常に読者の前に作品を通して提示し、固定させない三島の「作家像」形成の形が示されているのである、と。

そして終章であらためて論者は、前期三島文学の形成の背後にニーチェ哲学があることを強調する。「アポロン」と「ディオニュソス」の合一の理論を手本とすることによって前期三島文学が形成され、その延長上に後期三島文学も生み出されていくことになる、と指摘し、本論文の先に後期三島文学への見通しを示唆しつつ、論文は閉じられる。

2. 本論文の評価

本論文は、まずその基本的な前提として、現在の三島由紀夫研究に関して十分に検討がなされており、その上で、論者は自身の論を説得力を持って展開し、研究史上に位置づける事が出来ている。

次いで、研究の対象とした時期、昭和20年代後半の時代把握も問題ないと認められる。文学史的な前提として、当時私小説的な読みが批評家の作家作品に対するスタンスとして一般的であった、という把握も読者＝批評家、という見方をすれば誤ってはいない。

三島のニーチェ受容を具体的に示そうというのが論者の目的の一つであるが、そのため

に繰り返されるニーチェや西洋哲学をめぐる考察、特にその美学的側面や実存思想の受容に対する考証も、独逸哲学や実存思想の専門研究の立場から、一つの見方として首肯できると判断された。

論の中心は三島由紀夫の作家像の生成についてである。

三島が自己演出する作家だというのは一般的な評価であるが、本論文の特徴は、その作家像は、〈作者—作品—読者〉の関係の中で生成されるもので、〈仮象〉に過ぎないとし、作品、パフォーマンスを通じてフィクショナルな作家像を提出し、その〈仮象〉である作家像を〈作者—作品—読者〉の関係の中で作り上げ、壊し、再構築するという作業を続けるという、三島独自の作家像造形法を提示した。その際、従来の定説のように1955年を境に三島文学の前期、後期を対照的に捉えるのではなく、前期のうちに後期の胚胎を見出し、両者を連続的に捉える道筋を示した。そこに独自性がある。また、三島の文学的方法の確立の過程を示すという論者の今ひとつの目的の論証において、〈頼安もの〉〈菊田次郎もの〉という、従来注目され論じられることが少なかった作品を取り上げ、それによって時代への視点の提示や、ニーチェ受容の実態を示すことに成功した点も、独自の成果であると言える。

三島由紀夫自身による自作解説に寄り添いすぎていないか、という心配はあるものの、イメージ先行の嫌いのある三島由紀夫像に基づく素朴実体論的な三島論と一線を画し、三島由紀夫像を構築していくプロセスと像そのものの変容の仕組みを明らかにするという、独自のアプローチを行っている、と評価できる論文である。また、今後、〈頼安もの〉〈菊田次郎もの〉によって明らかにした三島の自己像の創出方法が、たとえば他の長編小説においてどのように適応されるか、後期の肉体的パフォーマンスによる作家像創出に、同時期の言葉、文章による自己像創出が関わっていることはないか、等、様々な問題へと発展することが可能になろう。前期三島、後期三島という二つの作家像の連続をどのような形で新たに創出できるか、期待したいところである。

3. 本論文の審査の過程

平成30年10月30日

博士学位申請論文提出。

平成30年11月2日

学長より審査付託。

平成30年11月13日

大学院委員会において、上石学、大塚美保、川津誠3名を委員とする博士学位申請論文審査委員会設置。論文の各委員による査読開始。

平成30年12月7日

審査会議開催。学術雑誌への論文発表と学会発表の履歴が人文学専攻の博士学位請求資格を満たすものであることを確認。その後審査員による、論文の内容、問題点、評価点に関する議論を行い、総合的な評価をおこなった。その結果、合格の可能性の高い博士学位請求論文として、次に提出者本人の口頭試問に進むことを確認した。

平成31年1月9日

3名の委員により、提出者に対して、論文の内容、研究姿勢、今後の研究方針に関して口

頭試問を行った。解答の内容、態度への評価を審査後委員 3 名で審議、公開審査に進むことを確認した。

平成 31 年 1 月 25 日

聖心女子大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程の教員 9 名の出席により、公開審査を行った。提出者本人がパワーポイントを用いて論文要旨を説明した後、質疑応答をおこなった。プレゼンテーション力、質問への解答などを総合的に審査した結果、合格としてよいという結論を得、大学院委員会に付議することを決定した。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第17号

2019（平成31）年4月25日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811（代表）